

学習者の主観的評価からみた学習指導要領高等学校 保健体育科の目標における達成度について

柴 山 慧・赤 松 喜 久・大 山 創 志

本研究では学習指導要領高等学校保健体育科の目標について、学習者の主観的観点からその達成度を測り、新学習指導要領の趣旨を生かしたこれからの体育について展望していくことを目的とした。調査は大学の体育科目を履修する大学生を対象とし、高等学校の体育について、その目標を示したうえで、体育の目標と履修してきた体育との相違点等に関する自由記述項目を含む質問紙調査法で実施した。その結果、各目標について肯定的な回答が74%～84%と非常に高い値を出しており、学校現場での保健体育科の取り組みが、大半の生徒に対して功を奏していると言えた。しかしながら、一部の生徒には否定的に受け止められているという点も示された。

キーワード：学習指導要領、高等学校、保健体育科、目標、生涯スポーツ

研究の背景及び研究目的

平成20年3月、小・中学校の学習指導要領及び幼稚園教育要領が、平成21年3月、高等学校・特別支援学校の学習指導要領がそれぞれ改訂された（以下、今次改訂の学習指導要領を新指導要領とする）。すでに小・中学校においては新指導要領に基づく教育課程が実施されており、高等学校においては（一部の教科を除き）平成25年度入学生から実施の運びとなる。中学校における、武道、ダンスの必修化や、体づくり運動の一層の重視という改訂箇所もあげられるが、指導内容の体系化という改訂のポイントは、小学校から高等学校までの体育、保健体育（以下、体育とする）の学習・指導を通して何が目指されるのかを明示したものとして特に注目される。そこには、文化的にも成熟した生涯スポーツ社会の実現と、その考えを擁する国民の育成を進めていきたいという理念が込められているものと考えられる。しかし、成人のスポーツ実施率は増加傾向にはあるものの、島崎も唱えるSport for all（1人1人主体性と自律能力を持つすべての市民（みんな）が、みんな自身（個々）のために、みんなの努力によって、みんなのスポーツ欲求を充足する過程の総体）社会（島崎1997）の実現には、解決されるべき課題は少なくない。そして、根源的な課題として、体育の学習・指導を通して学習者に身に付けさせたい「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」がどのような力なのかが明確になっているとは言い難い。改訂前学習指導要領の教科の目標には、小学校では生涯にわたって運動に親しむという記述がみられず、中学校になってから、「積極的に運動に親しむ資質や能力を育てる」という記述があり、高等学校においては、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てる」

という記述がなされている。昭和52年の学習指導要領の改訂以降、生涯スポーツという概念が用いられるようになってきているものの、新指導要領に教科の目標が明示されるまで、生涯スポーツに資する力を体育がどのように体系的に育んでいくのかについて、必ずしも、明確であったわけではないという状況がうかがわれる。

新学習指導要領においては、表1に整理したように、小学校から高等学校までの12年間の体育の学習・指導を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を段階的に学習・指導していくものとされた。あわせて、各学校段階をまたいで、4年毎の発達の段階のまとまりで、学習・指導の内容となる運動を配列していくこととなっている。

表1 学習指導要領の改訂にみる生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の取り上げ方

	改訂前学習指導要領	新学習指導要領
小学校	－	生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる
中学校	積極的に運動に親しむ資質や能力を育てる	生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てる
高等学校	生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てる	生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てる

小学校		中学校		高等学校
1年～4年	5・6年	1・2年	3年	1年～3年
各種の運動の基礎を培う時期	多くの領域の学習を経験する時期		卒業後に少なくとも一つの運動やスポーツを継続することができるようにする時期	

図1 新学習指導要領にうたわれる発達の段階のまとまりごとの指導内容の体系化

また、先行研究を参考にすると「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」については、「スポーツ享受能力」である（池田 2000）。あるいは、「運動・スポーツをする力」、「運動・スポーツをよむ力」、「運動・スポーツを支える力」（林 2005）、などの定義が見受けられるが、学習者が経験できるほどの段階まで具体化されているとはいえない状況である。そのような状況下で、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の構造に関する研究（大山2010）は、大きなヒントを与えてくれる。生涯にわたってスポーツに親しむ資質や能力の構造については、課題分析、協調性、技能・知識、課題発見の4因子からなることが明らかにされ、さらに各因子が相互に影響し合い、学校を卒業後にスポーツに親しむという動機へとつながることが明らかにされている（大山 2010）。

図2より注目される点は、課題発見には技能・知識、協調性が影響し、課題分析には課題発見、技能・知識が影響を及ぼすという関係性にあるというように、生涯にわたってスポーツに親しむ資質や能力が相互に影響し合う多次元的能力であるという点である。また、そのような能力が卒業後のスポーツ実施動機に直接影響するのではなく、体育の学習・指導で培った能力

が自分にとって役に立つという認識が仲介することによって、卒業後のスポーツ実施動機に直接影響するものであるという点は、特に注目される。つまり、個々の学習者にとっての学習課題と遊離し、技能・知識を授けることでとどまる体育では、生涯スポーツの観点から限界があるということである。

そこで、現状における学習者の実態がどうなのかを、学習者を対象とする調査の分析結果で次にみていくことにする。

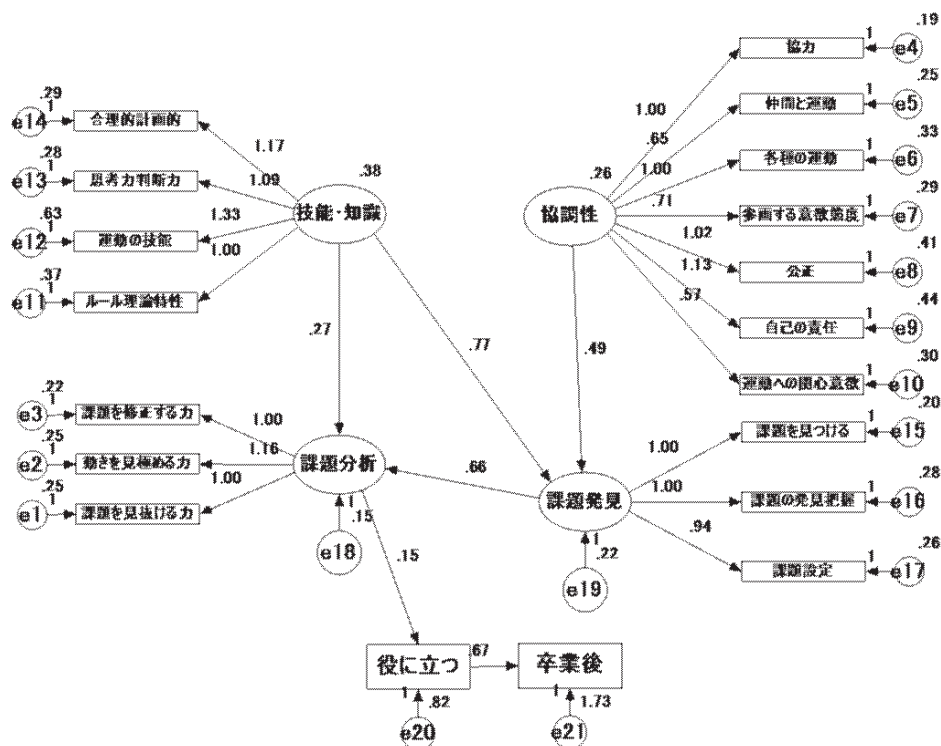


図2 生涯にわたってスポーツに親しむ資質や能力の構造 (大山 2010 より引用)

以上を踏まえて、本研究では大山が明らかにした「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の構造的な理解の上に、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の観点から、前学習指導要領下で体育を履修してきた学習者の意識を調査することによって、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」を身に付けさせていくことにかかわる現状の一端や課題を明らかにし、新指導要領の趣旨を生かしたこれからの体育について展望していくことを目的とする。

研究の方法

「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の構造については、大山が導出した、課題分析、協調性、技能・知識、課題発見の4因子を主要な手掛かりとした（その具体的な枠組みについては、本論中に記述する）。

調査は、大学の体育科目を履修する大学生を対象とし、質問紙調査法を実施した。質問項目は学習指導要領高等学校保健体育科の目標に示されている「心と体を一体としてとらえ、健康・安全や運動についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力を育てるとともに、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。」を分解し、「心と体は一体だと思いますか。」、「健康と安全や運動についての理解と、運動の合理的な実践が経験できましたか。」、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか。」、「健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上が図れましたか。」、「明るく豊かで活力ある生活を営む態度が育てられましたか。」と設定した。また、回答者自身が実際に履修してきた体育との相違点について自由記述できる質問も設定した。なお、実施時期は、2011年10月～2012年7月である。調査用紙を配布した学生は、近畿地方の2つの大学における、スポーツ実技（回答数59、有効回答数54）、体育講義（回答数132、有効回答数124）、専門体育（回答数135、有効回答数131）受講者であり、総回答数326、有効回答数309となった。いずれも教員免許、保育士免許にかかわる授業のため、運動やスポーツが得意な学生だけでなく、苦手な学生も含まれている。

調査結果と考察

「明るく豊かで活力のある生活を営む態度が育てられましたか」という問いに対しては、「育てられた」が83.7%、「育てられなかった」が5.5%、「わからない」が10.7%であった。

表2 活力ある生活を営む態度の育成についての意識

	そう思う	そう思わない	わからない
度数	257	17	33
%	83.7	5.5	10.7

また、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか」という問いに対しては、「身についた」が74.3%。「身につかなかった」が10.4%、「わからない」が15.3%であった。

表3 生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力の育成についての意識

	そう思う	そう思わない	わからない
度数	228	32	47
%	74.3	10.4	15.3

次に、「明るく豊かで活力のある生活を営む態度が育てられましたか」（以下、活力態度とする）、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか」（以下、資質能力とする）の2つの設問について、「わからない」という回答を「そう思わない」という否定回答として、両方の設問に対する回答が肯定的回答、否定的回答の二項となるようにカテゴリーを縮約し、クロス集計を行なった。その結果、資質能力が身についたと認識する者で活力態度が身についた認識する者は79.0%であるのに対し、資質能力が身についたとは、認識しなかつ

た者では、活力態度が身についた認識する者は50.0%であった。資質能力の育成に関する肯定派、否定派の両者の回答比率には有意差が認められた。

表4では、資質能力、活力能力という外的基準を予め措定した上での分析結果であるので、資質能力を育むことが活力能力の向上に寄与すると断言してしまうことには問題が残るとしても、資質能力を育むことの重要性が明らかにされたことには間違いないものと考ええる。このことは、以下の自由記述項目の分析からも同様に推察し得るものといえよう。

表4 資質能力と活力能力のクロス集計結果

資質能力	活力態度		合計
	そう思う	そう思わない	
そう思う	203	54	257
	79.0	21.0	100.0
そう思わない	25	25	50
	50.0	50.0	100.0
全体	228	79	307
	74.3	25.7	100.0

$$\chi^2=18.405, \text{d.f.}=1, p<0.001$$

表5 体育の目標と実際の体育のギャップ

自由記述項目*1	度数
先生に言われたことや指示をただやっているだけで、心と体が一体だとは思わなかった。	14
ただスポーツをやっているだけで、健康や安全について理解や合理的な実践の授業は行われていない。	17
技術や技能は向上したが、生涯にわたってスポーツを楽しむにはどうすればいいのかについて学んでいない。	10

*1：記述された表現が異なる場合でも、趣旨・内容をもとに上記3つのカテゴリに整理した。

本研究における分析の試みは、記述した通り、各設問間の関連性が高く、どの項目がどの項目に影響を及ぼすのかを特定の分析することが困難である。したがって、ここでは、外的基準を予め措定するのではなく、今回用いた各項目によって、どのような次元が抽出されるのかという分析手法も併用することとした。今回、調査で回答を求めた、「心と体は一体だと思いますか」（以下、一体とする）、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか」（以下、資質とする）、「健康と安全や運動についての理解と、運動の合理的な実践が経験できましたか」（以下、実践力とする）、「明るく豊かで活力のある生活を営む態度が育てられましたか」（以下、態度とする）、「健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上が図れましたか」（以下、理解とする）の5項目について、多重コレスポンデンス分析により、各項目（2を肯定、1を否定と変数変換して分析）の肯定、否定の回答の仕方や、オブジェクト（回答者）の等質性の分析を試みた。

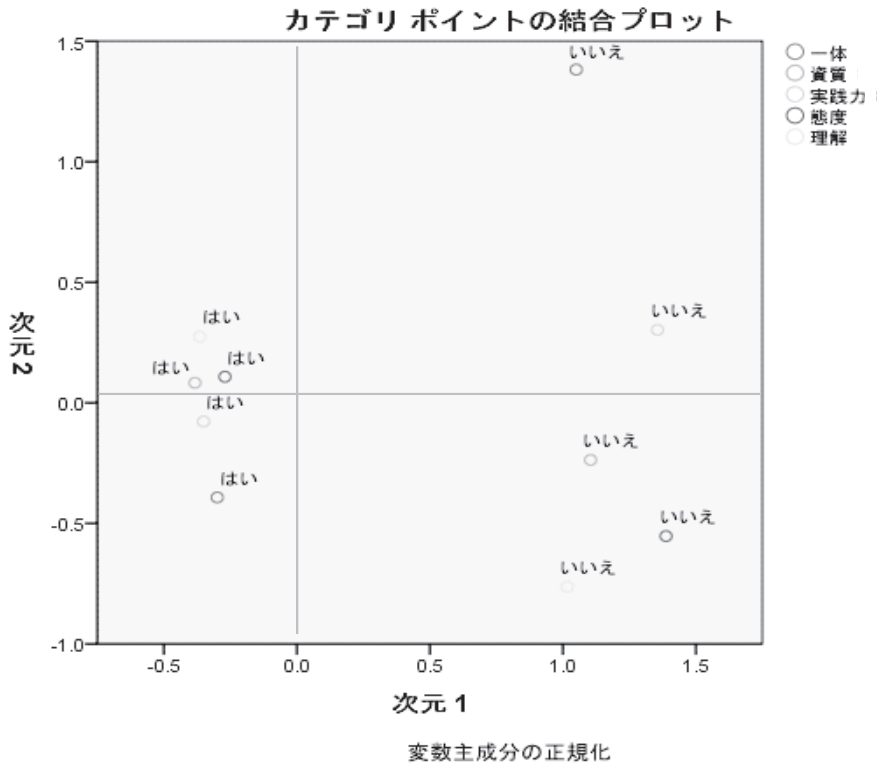


図3 実際の体育に対する認識についての等質性分析結果（カテゴリー統合）

その結果、次元1は、すべての項目について肯定的か否定的かという軸であり、軸の右側に否定的、軸の左側に肯定的となっている。また、次元2は、軸の下方が、一体と実践力の2つのカテゴリーが否定的で、資質と態度および理解の3つのカテゴリーが肯定的となっており、軸の上方は、その逆となっている。この結果のみから2つの次元について解釈を加えることは困難であるが、図4に示したように、全ての回答者を2軸上にプロットできることから、2軸の組み合わせによって、抽出できる4つの各セルに当てはまる者の属性がどのようなものであるの等の追試・検証が今後の研究課題として残されることになる。

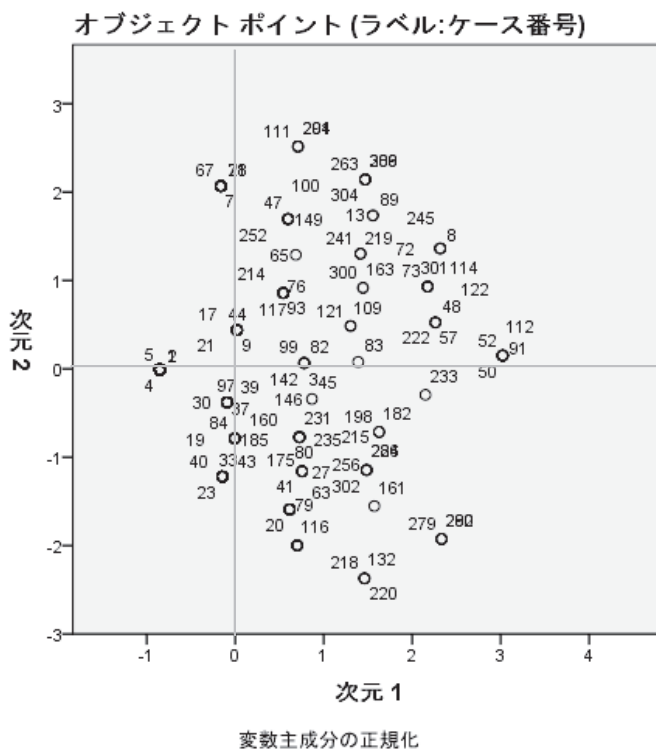


図4 実際の体育に対する認識についての等質性分析結果（オブジェクトプロット）

「心と体は一体だと思いますか」への回答について

この質問については78%が「思う」と回答したが、13%が「思わない」と回答しており、他の回答と比べても、この目標に対する否定的な回答は多い結果となった。その理由を「あなたが受けた体育の授業と上記の目標についての相違点」の自由記述から推測すると、「無理やりやられた」、「先生の指示通りに動くだけだった」という文言があり、「心と体が一体とは思わない」という回答につながっていくものが散見された。

このことから、生徒が主体的に学んでいけるような教育が実施されていない、もしくは、先生がそのように促していても、生徒自身が主体的に学んでいないような教育が行われていると思われる。

「健康と安全や運動についての理解と、運動の合理的な実践が経験できましたか」、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか」、「健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上が図れましたか」への回答について

この3つの質問への回答として共通して言えることは、「わからない」という回答が、上記の順に19%、17%、14%という高い値を出していることである。

これについては、単に質問の意図がわからないということではなく、高等学校での体育の授業を振り返っただけでは、「はい」とも「いいえ」とも判断しかねるという意識が働いたもの

だと思われる。

今後の研究課題

今後の研究課題としては、質問紙の回答者数をできるだけ多くしていくことや、性別差、スポーツ経験の差、スポーツや運動に対する有能感の差なども考慮していくことなどが考えられる。

まとめ

本研究では「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」の構造的な理解の上に、その観点から、前学習指導要領下で体育を履修してきた学習者の意識を調査することによって、「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力」を身に付けさせていくことにかかわる現状の一端や、課題を明らかにし、新指導要領の趣旨を生かしたこれからの体育について展望していくことを目的とした。その結果、全体的には非常に高い達成率となっており、高等学校現場で学習指導要領の高等学校保健体育科の目標がよく理解され、それに基づいた教育が行われていたことが証明された。

しかしながら一部の生徒には、「心と体を一体としてとらえる」ことができないような教育を受けてきたという意識も存在し、「健康と安全や運動についての理解と、運動の合理的な実践」や、「生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力」、「健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上」についても、高等学校での経験から「はい」とも「いいえ」とも言い切れず「わからない」という回答もあった。これらは、全体から見れば少数ではあるが、決して無視できるものではなく、このような生徒をいかに少なくしていくかが、将来的に「スポーツは好きな人だけがするもの」という日本人の意識を変えていくきっかけになるのではないかと考えられる。そのためには、これまで以上の多くの生徒が保健体育科の目標を理解できるような、よりきめ細かな教育活動が必要になってくると思われる。

前述したとおり、高等学校教育は国民の大半がその人生において最後に受ける学校教育となるので、高等学校保健体育の学習指導要領の目標と、それに即した教育活動は、わが国が文化的にも成熟した生涯スポーツ社会となるために、大きな意味を持つものである。

参考文献

- 「小学校学習指導要領解説 体育編 平成11年5月」1999
- 「中学校学習指導要領解説 保健体育編 平成11年9月」1999
- 「高等学校学習指導要領解説 保健体育編 平成11年12月」1999
- 「小学校学習指導要領解説 体育編 平成20年8月」2008
- 「中学校学習指導要領解説 保健体育編 平成20年9月」2008
- 「高等学校学習指導要領解説 保健体育編 平成21年12月」2009
- 「生涯スポーツにおける学校体育のあり方」2000 世羅 晶子 広島大学付属中・高等学校研究紀要
- 「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」2009 森山 進 高田 和子 滋賀大学教育学部附属中学校研究紀要

「自ら活動する喜びを味わうことのできる保健体育学習Ⅴ－確かな学びとスポーツ享受能力－」2000

池田 靖秋 北海道教育大学教育学部附属函館中学校研究紀要

「運動に親しむ資質や能力の育成上の課題」2010 文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課

「平成20年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査結果について【概要版】」2008 文部科学省

「生涯にわたって運動に親しむための問題解決力の育成」2005 表 洋一 佐々木 久美子 金沢大学研究紀要

「事業所従業員が運動教室参加後に運動を継続していく要因の検討」2010 熊坂 智美 佐藤 美恵 黒田 真理子 福島県立医科大学看護学部紀要

「学習指導要領の改訂と体育授業の課題」2008 松本 格之祐 びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要

「生涯にわたって運動・スポーツを楽しむための運動・スポーツを「する力」「よむ力」「ささえる力」の育成」
2005 林 政孝 島田 薫 佐藤 毅 造田 哲也 石黒 千恵子 澁本 あゆみ 学習指導の実践的研究・中学校編 北海道大学研究紀要

「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の構造～体育専攻学生を対象とする調査を基に～」2010 大山 創志 大阪教育大学修士論文集 第47号

「スポーツに遊ぶ社会にむけて－生涯スポーツと遊びの人間学－」1998 島崎 仁 不昧堂出版

資料

高校時代の体育の授業についてのアンケート

この質問紙は、高等学校における体育の授業について研究する一環として実施しているものです。回答については研究発表および教材以外では使用いたしません。また個人が特定されることはありませんので、協力いただくようよろしくお願いします。

1. あなたの高校時代の体育の授業を振り返って以下の質問に答えてください。

・心と体は一体だと思いますか。

A 思う B 思わない C わからない

・健康と安全や運動についての理解と、運動の合理的な実践が経験できましたか。

A できた B できなかった C わからない

・生涯にわたって計画的に運動に親しむ資質や能力が身につきましたか。

A 身についた B 身につかなかった C わからない

・健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上が図れましたか。

A 図られた B 図られなかった C わからない

・明るく豊かで活力ある生活を営む態度が育てられましたか。

A 育てられた B 育てられなかった C わからない

2. 高等学校学習指導要領体育科の目標を読んだうえで、あなた自身が高校で経験した体育の授業との相違点や思ったことを記述してください。

The achievement and aim of the government guidelines for teaching high school health and physical education as seen from a students subjective evaluation

Kei SHIBAYAMA, Yoshihisa AKAMATSU and Soshi OYAMA

This study measures the degree of achievement from a learners subjective point a view concering targets of high school government guidelines regarding teaching and viewing of the future of physical education reflected in the new high school government guidelines for teaching. Investigations have shown that the target curriculum for gymnastics of high school and college students to study physical education and sports in universities was carried out by a questionnaire survey method containing free writing concerning the differences between the targets of gymnastics and the study of gymnastics. Results showed affirmative replies of between 74% to 84%, and a very high value regarding each target, showing that the measure of health and physical education in schools can be said to have a positive effect on most students. However, the point of negativity by some students can never be over looked in government guidelines for teaching education concerning the whole country of Japan, Since standards of the curriculum were fixed, it has been seen that room for improvement remains concerning scrutinization of the contents and osmosis at schools.

